



秋聲全集

第四卷

秋聲全集 第四卷 (第四回配本)

昭和三十七年八月二十五日 印刷  
昭和三十七年八月三十日 發行

定價 一、二〇〇圓



著者 德田秋聲

發行者 栗林茂  
東京都中央區京橋一丁目七番地

印刷者 高橋武夫  
東京都新宿區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所 株式會社 雪華社

東京都中央區京橋一丁目七番地  
振替 東京 四二一五〇番

## 目次

|       |         |
|-------|---------|
| 新世帯   | 一       |
| 足跡    | 七       |
| 黴     | 三五      |
| 爛     | 四七      |
| 解説    | 中村光夫 五一 |
| 四篇の校閲 | 徳田一穂 五五 |

新  
世  
帶



新吉がお作を迎へたのは、新吉が廿五、お作が二十の時、今から丁度四年前の冬であつた。

十四の時豪商の立志傳や何かで、少年の過敏な頭腦を刺戟され、東京へ飛出してから十一年間、新川の酒問屋で、傍目もふらず滅茶苦茶に働いた。表町で小さい家を借りて、酒に醬油、薪に炭、鹽などの新店を出した時も、飯喰ふ隙が惜しい位ゐ、クル／＼と働き詰めで居た。始終襷掛けの足袋蹴のまゝで、店頭みせさきに腰かけて、モタ／＼と氣忙しさうに飯を掻ツ込んでゐた。

新吉は一寸好い縹致である。面長の色白で、鼻筋の通つた、口元の優しい男である。ビジネスカットとか云ふのに刈込んで、襟の深い毛絲のシャツを着て、前垂懸で立働いて居る姿にすら、何所となく品があつた。雪の深い水の清い山國育と言ふことが、皮膚の色澤の優れて美しいのでも解る。

お作を周旋したのは、同じ酒屋仲間の和泉屋と云ふ男であつた。

「内儀かみさんを一人世話しませう。好いのがありますぜ。」と和泉屋は、新吉の店が如何か成立ちさうだと云ふ目論見もくろみのついた時分に口を切つた。

新吉は直ぐには話に乗らなかつた。

「まだ海のものとも山のものとも知れねんだからね。此なら大丈夫屋臺骨が張つて行けると云ふ見越がつかんことにや、私あつし不安心で、迎むかへ鼻かなど持つ氣になれやしない。鼻かアを持ちや、子供が生れるものと覺悟せんけアなんねえしね。」と其淋しい顔に、不安らしい笑を浮べた。

けれども新吉は、其必要は感じて居た。注文取に歩いて居る時でも、洗湯へ行つて居る間でも、小僧ばかりでは片時も安心が出来なかつた。帳合や、三度くゝの飯も、自分の手と頭とを使はなければならなかつた。新吉は、内儀さんを貰ふと貰はないとの經濟上の得失などを、深く綿密に考へて居た。一々算盤珠を弾いて、口が一つ殖えれば如何、二年経つて小供が一人産れば如何なると云ふこと迄、出来るだけ詳しく積つて見た。一年の店の利益、貯金の額、利子なども最少額に見積つて、間違のない處を、略見極をつけて、幾年目に何れだけの資本が出来ると云ふ勘定をすることぐらゐ、新吉に取つて興味のある仕事はなかつた。

三月ばかり、内儀さんの問題で、頭腦を悩まして居たが、矢張貰はずにはゐられなかつた。

お作は其頃本郷西片町の、或官吏の屋敷に奉公して居た。

産は八王子のずつと手前の、或小い町で、叔父が傳通院前に可成な鯉節屋を出して居た。新吉は、或日わざゝ汽車で乗出して女の産在所へ身元調べに行つた。

## 二

お作の宅は、其町の可成大な荒物屋であつた。鍋、桶、瀬戸物、シャボン、塵紙、草履と云つた物をコテくゝと駢べて、老舗と見えて、黝んだ太い柱がツルくゝと光つて居た。

新吉は直ぐ近處の、怪しげな暗い飲食店へ飛込んで、チビくゝと酒を呑みながら、女を捉へて、荒物屋の身上、家族の人柄、土地の風評などを、抜目なく訊糺した。女は油くさい島田の首を突出しては、酌をして居たが、知つて居るだけのことは話してくれた。田地が少しばかりに、小い物置同様の、倉の

あることも話した。兄が百姓をして居て、弟が土地で養子に行つて居ることも話した。養蠶時には養蠶もするし、其方此方へ金の時賃などをして居る事も辯つた。

新吉自身の家柄との權衡から云へば、餘りドツとした縁邊でもなかつた。新吉の家は、今は悉皆零落して居るけれど、村では筋目正しい家の一ツであつた。新吉は七八歳までは、お坊ちやんで育つた。親戚にも家柄の家が澤山ある。物は亡しても、家の格は然迄低くなかつた。

けれど、新吉は其様なことには餘り頓著もしなかつた。自分の今の分際では、それで十分だと考へた。其事を、同じ村から出てゐる友達に相談してから、新吉は漸く談を進めた。見合は近間の寄席ですることにした。新吉は其友達と一緒に、和泉屋に連れられて、不斷著のまゝでヒヨコくと出掛けた。お作は薄ッぺらな小紋縮緬のやうな白ッぱい羽織のうへに、シヨールを着て、叔父と田舎から出てゐる兄との真中に、少し顔を斜にして坐つて居た。叔父は毛むくじやらの様な顔をして、古い二重廻を着てゐた。兄は菱なりの様な顔の口の大きい男で、此も綿ネルのシャツなど著て、土くさい様子をして居た。横向であつたので、新吉は女の顔を能く見得なかつた。色の白い、丸ぼちやだと云ふ事だけは解つた。お作は人の肩越に、ちよい／＼新吉の方へ目を忍ばせてゐたが、新吉は胸がワク／＼して、頭腦が酔つたやうに爲つてゐた。

寄席を出るとき、新吉は出てゆくお作の姿をチラリと見た。お作も振顧つて、正面から男の立姿を二度三度熟視した。お作は小柄の女で、歩く様子などは、坐つて居るよりも多少好いやうに思はれた。

其處を出ると、和泉屋は不恰好な長い二重廻の袖をヒラ／＼させて、一步先にお作の仲間と一緒に歸つた。

「如何だい、どんな女だい。」と新吉は私と友達に訊いた。  
何だか頭腦がボツとして居た。叔父や兄貴の百姓々々した風體が、何となく氣に懸つた。でも厭で堪らぬと云ふ程でもなかつた。

### 三

明日は朝早く、小僧を注文取に出して、自分は店頭で精々と樽を漉いでみると、まだ日影の薄ら寒い街を、急々と此方へやつて来る男がある。柳原ものの、薄ッぺらな、例の二重廻を著込んだ和泉屋である。

和泉屋は、羅紗の硬さうな中折帽を脱ぐと、軽く挨拶して、其まゝ店頭へ腰かけ、氣忙しさうに帶から蓑入を抜いて蓑を吸出した。

「君の評判は大したもんですぜ。」と和泉屋は突如に高聲で辯り出した。「先方ぢやもう悉皆氣に入つちやつて、何が何でも一緒に爲たいと云ふんです。」

「冷評しちや不可せんよ。」と新吉は矢張サク／＼遣つてゐる。氣が氣でないやうな心持もした。

「いや眞實ですよ。」と和泉屋は反身になつて、「其で話は早い方が好いからツてんで、今日にでも日取を決めてくれろと云ふんですがね、如何です、女も決して悪い方ぢやないでせう。」と和泉屋は、其から女の身上持の好いこと、氣立の優しい事などをべラ／＼と説立てた。星廻や相性のことなども辯じて、獨で吞込んでゐた。支度は素より有らう筈はないけれど、其でも好かれ悪しかれ、簞笥の一位位は持つて来るだらう。夜具も一組は持込むだらう。左に右貰つて見給へ、同じ働くにも、如何に張合があ

つて面白い。あの女なら請合つて桝新のお釜を興しますと、小汚い齒齦に泡を溜めて説教めた。

新吉は帳場格子の前の處に腰かけて、何やら物足りなさうな顔をして聽いてゐたが、「ちや貰はうかね。」と首を傾けながら低聲に言つた。

「だが、来て見て、吃驚するだらうな。何ぼ何でも、豈夫こんな亂暴な宅だとは思ふまい。けど、まあ可いや、君に任しておくとしませう。逃出されたら逃出された時のことだ。」

「其様なもんぢや有りませんよ。物は試し、まあ貰つて御覽なさい。」

和泉屋は欣々もので歸つて行つた。

其から七日ばかり經つた或晩、新吉の宅には、色々の人が多勢集つた。前の朋輩が二人、小野と云ふ例の友達が一人——此は殊に朝から詰めかけて、部屋装飾や、今夜の料理の指揮などしてくれた。障子を張替たり、何處からか安い懸物を買つて来てくれなどした。新吉の著るやうな斜子の羽織と、何やらクタ／＼の袴を借りて来てくれたのも小野である。小さい口錢取などして、小才の利く、世話好の男である。

料理の見積を此男が爲てくれた時、新吉は優しい顔を顰めた。

「どうも困るな、こんな取著身上で、其様な贅澤な眞似なんか爲れちや……。何だか知んねえが、其引物とか云ふ物を廢さうぢやねえか。」

#### 四

小野は怒りもしない。愛嬌のある丸顔に笑を漂べて、「然う吝なことを言ひなさんな。一生に一度ち

やないかな。此様な物を儉約したからつて、何程も違ふものぢや有りやしない。第一見窄しくて可けな  
いよ。」

「でも君、私ア眞實の處酷工面して婚禮するんだからね。何も苦しい思をして、虚榮を張る必要もな  
らうぢやないか。ね、小野君私ア然う云ふ主義なんだぜ。君等のやうに懷手して好い錢儲の出来る人た  
ア少し違ふんだからね。」

「理窟は理窟さ。」と小野は笑顔を放さず、

「他の場合と異ふんだから、少しは世間體で云ふことを考へなくちや……。好いぢやないか、後でミツ  
チリ二人で稼げば。」

新吉は黒い指頭に、臭い莢を摘んで、眞鍮の煙管に詰めて、炭の粉を埋けた鐵瓶の下で火を點けると、  
思案深い目容をして、濃い煙を噴いてゐた。

六疊の部屋には、もう總桐の簞笥が一棹据ゑられてある。新しい鏡臺も其上に載せてあつた。借りて  
來た火鉢、黃縞の座蒲團などが、絳い疊の上に積んであつた。丁度晝飯を済したばかりの處で、耳の遠  
い傭婆さんが臺所で其後始末をしてゐた。

新吉はまだ何やらクドク云つて居た。小野の見積書を手に取つては、獨で胸算用をしてゐた。此處  
へ店を出してから食ふ物も食はずに、少許宛溜めた金が、既う三四十もある。其を此際大略噴出して  
はなければならぬと云ふのは、新吉に取つて些と苦痛であつた。新吉は慍うした大業な式を擧げる意は  
なかつた。竊と興入をして、私と儀式を済す筈であつた。強ち金が惜いばかりでない。一體が、目に立  
つやうに晴々しいことや、華やかなことが、質素な新吉の性に適はなかつた。人の知らない處で働いて、

人に見著みからない處で金を溜めたいと云ふ風であつた。どれだけ金を儲けて、何れだけ貯金がしてあると云ふことを、人に氣取られるのが、既に好い心持ではなかつた。獨立心と云ふやうな、個人主義と云ふやうな、妙な偏かたよつた一種の考が、丁稚奉公をしてから以來、彼の頭腦あたまに強く染込んで居た。小野の干渉は、彼に取つては、餘り心持好くなかつた。と言つて、此男が無くては、此場合、彼は幾ど手が出なかつた。グヅ／＼言ひながら、分断きつぱり反抗する事も出来なかつた。

三時過になると、彼は床屋に行つて、其から湯に入つた。歸つて來ると、家はもう明あかりが點いてゐた。

新吉は、「アム」と言つて、長火鉢の前に坐つた。小野は自分の花嫁でも來るやうな晴々しい顔をして、「如何どうだ新さん待遠しいだらう。茶でも淹いれようか。」

「莫迦ばか言ひたまへ。」新吉は淋しい笑方わらひかたをした。

## 五

するうち綺麗に磨立てられた臺ランプが二臺、狹苦しい座敷に點ともされ、火鉢や座蒲團も整然きちんと駢ならべられた。小い島臺や、銚子、盃なども、何時の間にか、浅い床に据すゑられた。臺所から、料理が持込まれると、耳の遠い婆さんが、旋まがて一々叮嚀ていねいに拭いた膳の上に並べて、其から見事な蝦えびや蛤はまぐりを盛つた、竹の色の青々した引物の籠をも、ヅラリと茶の室へ并べた。小野は新聞紙を引裂いては、埃の被からぬやうに、御馳走の上に被かせて行いてゐた。新吉は氣が驟さくして來た。切立の銘撰めいせんの小袖を著込んで、目眩めがいやうな目容めづきで、彼方あつちへ行つて立つたり、此方こつちへ來て坐つたりしてゐた。

「サア、此で此方の用意は悉皆すつかり出來揚つた。何時なんときお出でなすつても差問さしつかへないんだ。マア一服しよう。」

と蜻蛉の眼めだまのやうに頭を光らせながら、小野は座敷の真中に坐つた。

「イヤ御苦勞ごくろう」。と新吉も外の二人と一緒に傍そばに坐つて、頭を掻きながら、「私あつしア如何も、斯こん様な事にや一向慣れねえもんだからね……。」と分疏ぶんそしてゐた。

「何なにに、僕だつて、何を知つてるもんか、出鱈目さ。」と笑つた。

「今夜はマア疲直つかねしに大いに飲んでくれ給へ。君が第一のお客様なんだからね。」

新吉は此晴々しい席に、親戚みよりの者と云つては、唯の一人も無いのを、何だか頼たよりなくも思つた。如何か慍いうか此まで漕ぎつけて來た、長い年月の苦勞を思ふと、迂廻うねりくねつた小徑を色々に歩いて、廣い大道へ出て來たやうで、昨日までのことが、夢のやうに思はれた。是からが責任が重いんだと云ふ感激もあつた。明るい、神々しいやうな燈火が、風もないのに眼先に搖ゆらいで、新吉の眼には涙が浮んで來た。花のやうな自分の新妻が、不思議の縁の絲に引かれて、天上からでも降りて來るやうな感じもあつた。

「然しかしもう來さうなものだね。」と小野は膝のうへで見てゐた新聞紙から目を離して、「ひどく思はせ振ふるだな。」と生吠なまぐひをした。

「然さうですさうね。」

「けど、まだ暮れたばかりですもの。」と他の二人も目を見合せて、伸上つて、店口を覗いた。店は入口だけ残して、後は閉切つてある。小僧は火の氣のない帳場格子の傍に坐つて、懷手をしながら、コクリ／＼居睡みねりをして居た。時計が丁度七時を打つた。

小野と新吉とが、間もなく羽織袴を著けて坐直した時分に、靜しづかな宵の町をゴロ／＼と腕車くるまの響が、遠くから聞え出した。

「ソラ來た！」

小野は新吉と顔を見合つて起上つた。他の兩人も新吉も何と云ふことなし起上つた。

新開の暗い街を、鈍く曳いて來る腕車の音は、何となく物々しかつた。

四人は店口に肩を駢べ合つて、暗い外を見透してゐた。向の鹽煎餅屋の軒明が、暗い廣い街の片側に淋しい光を投げて居た。

## 六

新吉が胸をワク／＼させてゐる間に、五臺の腕車が、店先で梶棒を卸した。眞先に飛降りたのは、足の先ばかり白い和泉屋であつた。續いて降りたのが、丸鬚頭の短い首を据ゑて、何やら淡色の紋附を著た和泉屋の内儀さんであつた。三番目に見榮のしない小軀のお作が、ひよつこりと降りると、其後から、叔父の連合だと云ふ四十許りの女が、黒い吾妻コートを著て、「ハイ、御苦勞さま。」と軽い東京辯で、若い衆に聲かけながら降りた。兄貴は黒い鰐廣の中折帽を冠つて、殿をしてゐた。

和泉屋は小野と二人で、一同を席へ就かせた。

氣爽らしい叔母は些と垢脱のした女であつた。眉の薄い目尻の下つた、ボチャ／＼した色白の顔で、愛嬌のある口元から金齒の光が洩れてゐた。

「ハイ、これは初めまして……私は此の叔父の家内でございまして、實は此のお袋が可憎二三日加減が悪いとか申しまして、其で今日は私が出ましたやうな譯で、萬望まあ何分宜しく……。此度は又不束な者を差上げまして……。」とだら／＼と叔母が口誼を述べると、續いて兄もキウクツ張つた調子で挨拶

を濟した。

後は少時森として、蒼い煙の煙が、人々の目の前を漂うた。正面の右に坐つた新吉は、テラ／＼した頭に血の氣の美しい顔、目のうちにも優しい潤みを有つて、腕組したまゝ、堅くなつてゐた。お作は薄化粧した顔をポツと紅くして、俛いてゐた。坐つた膝も詰り、肩や胸のあたりもスツとした方ではなかつた。結立の島田や櫛笄も、夷げたやうな頭には何だか、持つて來て載せたやうにも見えた。でも、取澄した氣振は少しも見えず、折々表情のない目を舉げて、何處を見るときもなく瞋めると、目眩さうに又伏せてゐた。

和泉屋と小野は、袴をシュツ／＼云はせながら、狭い座敷を出たり入つたりして居たが、するうち銚子や盃が運ばれて、手輕な三々九度の儀式が濟むと、赤い盃が二側に居並んだ人々の手へ順々に廻された。

「お愛でたう。」と云ふ聲と一緒に、多勢が一齊にお辭儀を爲合つた。

新吉とお作の顔は、一様に熱つて、目が美しく輝いてゐた。

## 七

盃が一順廻つた時分に、小野が何處からか引張つて來た若い諸謳ひが、末座に坐つて、突然突拍子な大聲を張揚げて、高砂を謳出した。同時にお作が次の間へ著換に起つて、人々の前には膳が運ばれ、陽氣な笑聲や、話聲が一時に入亂れて、猪口が盛に其方此方へ飛んだ。

「サア、お役は濟んだ。此から飲むんだ。」和泉屋が言出した。

新吉も席を離れて、「私の處も未だ眞の取著身上で、御馳走と言つちや何もありませんが、酒だけア澤山有りますから、萬望マア御ゆつくり。」

「イヤなか／＼御丁重な御馳走で……。」と兄貴は大い掌に猪口を載せて、莫迦町噺なお辭儀をして、新吉に差した。「私は田舎者で、何にも知らねえもんでござえますが、何分切望よろしく。」

「イヤ私こそ。」と新吉は押戴いて、「何しろ未だ世帶を持つたばかりでして……加之私ア此方には親戚と云つては一人も無えもんですから、是でなか／＼心細いです。マア一つ皆さんのお心添で、一人前の商人になるまでは、眞黒になつて稼ぐ心算です。」

「飛んでもないこつて……。」と兄貴は返盃を兩手に受取つて、「此方とらと違えまして、伎倆がおりなさるから……。」

「オイ新さん、さう錢儲の話ばかりしてゐねえで、些とお飲りよ。」と小野は向側から高調子で聲かけた。新吉は罰が悪さうに振願いて、淋しい顔に笑を浮べた。「笑談ぢやねえ。明日から頭數が一人殖えるんだ。放心しちやゐらんねえ。」と低聲で言つた。

「イヤ、世帶持は其心懸が肝腎です。」と和泉屋は、叔母とシミ／＼何やら、談してゐたが、此時口を容れた。「此處の家へ來た嫁さんは何しろ幸ですよ。男ツ振は好し、伎倆はあるしね。」

「然でございますとも。」と叔母は楊枝で金齒を弄りながら、愛相笑をした。

「これでお内儀さんを可愛がれア申分なした。」と誰やらが混交した。

銚子が後から／＼と運ばれた。話聲が愈よ高調子になつて、狭い座敷には、酒の香と莸の煙とが、一杯に漂ふた。